

鶴岡市学校の在り方検討委員会（第1回会議） 会議要旨

1 会議の開催概要

○日 時 令和8年9月29日（火）午後6時30分～午後8時10分

○場 所 鶴岡市役所6階大会議室

○出席委員 18名

佐藤歌津子委員、三浦慎士委員、丸谷和香委員、佐藤明子委員、長谷川玲子委員、
榊原賢一委員、齋藤昭彦委員、齋藤美緒委員、佐藤嘉男委員、蛸井由美子委員、
五十嵐收一委員、齋藤秀幸委員、関山和秀委員、佐藤佑馬委員、今野新一委員、
石川敦委員、布川敦委員、毛呂光一委員

○アドバイザー 小宮山利恵子氏

○市出席者 〈教育委員会〉

教育長 成澤和則、教育部長 白幡有、管理課長 石川聡、
管理課教育施設在り方検討室長 疋田昌広、学校教育課長 秋山尚志、
学校教育課指導主幹 山中秀人、管理課教育施設在り方検討室主査 今野治、
管理課教育施設在り方検討室専門員 阿部純一

○傍 聴 者 12名

○会議次第 1 開会

2 挨拶（教育長）

3 委員紹介・会長選出について

4 これまでの学校適正配置の経過

鶴岡市学校の在り方検討委員会の設置の趣旨について

5 事例紹介

他市町村における学校適正配置検討の事例

6 協議

（1）「鶴岡市の今後の学校の在り方についての計画（第三期計画）」の
策定方法、策定フローについて

（2）第三期計画における検討対象校基準について

7 閉会

2 会議の結果概要

- これまでの学校適正配置の経過と「鶴岡市学校の在り方検討委員会」の設置趣旨について事務局から報告した。
- 他市町村における学校適正配置検討の事例についてアドバイザーから事例紹介した。
- 「鶴岡市の今後の学校の在り方についての計画（第三期計画）」の策定方法、策定フローについて事務局から説明した。
- 第三期計画における検討対象校基準について事務局から説明した。
- 第三期計画における策定方法、策定フロー、検討対象校基準について事務局案を了承した。

3 会議録

■次第3 会長の選出について

委員から立候補又は推薦を募ったがいずれも無く、事務局から次のとおり提案したところ、異議無く承認された。

会 長：毛呂光一 委員

副会長：佐藤嘉男 委員

■次第4 これまでの学校適正配置の経過

鶴岡市学校の在り方検討委員会の設置の趣旨について

質問は「次第6 協議」で受け付けた。

■次第5 事例紹介

他市町村における学校適正配置検討の事例

アドバイザーから、今治市（愛媛県）、上越市（新潟県）、酒田市（山形県）についての事例紹介があった。

（委員A）上越市の事例紹介の中で、教職員の加配について触れられていたが、その詳細についてもう少し詳しく話を伺いたい。

（アドバイザー）上越市には携わっていないため、資料を拝見した範囲での説明になるが、大規模校であれば教員数に余裕があるため、教科担任制や専科の配置、学級数に応じた副担任の配置など、効率的で手厚い指導体制をとりやすい。一方、小規模校を維持していく上では、学級数が少ない分だけ教員の定数も少なくなるため、個別の加配などが必要になってくる。上越市では、小規模校の維持を求める住民の声を受けて市が対応を検討し、県への要望等を通じて教職員の加配につなげたものと資料から理解している。

（委員B）アドバイザーからお話があったように、学校の適正配置を教育委員会だけで進めるのは非常に難しいと考えている。本市のスマートシティ構想を推進していくのであれば、まちづくり構想と学区再編がある程度一致していくことが理想ではないか。教育がまちづくりの後追いをしていると大きな歪みが生じ、結果として学校設置場所の綱引きが後から起きてしまう。今後も本市のまちづくり構想の中に適正配置基本計画を一本化していくことが重要ではないかと考えている。

1 点例を挙げると、スマートシティやコンパクトシティの構想で非常によく取り上げられているのが富山市である。富山市の人口は約 40 万人であり、富山県の人口の大部分が富山市に集積している。ここでも学区再編を含めて、公共交通や LRT（路面電車）、コミュニティバスを活用し、市民が歩いて暮らせるまちづくりを軸とした拠点化が進められている。このような形でデジタル技術の進化とともに進めていかなければ、単に人数という数だけで統廃合を進めるのは難しいのではないかと。もちろん、ある程度の基本的な人数規模は必要であるが、それと同時にまちづくりという観点から今後の統廃合を考えていかなければならないと考えている。ぜひご

指導いただきたい。

（アドバイザー）鶴岡市がコンパクトシティを目指して取り組まれていることは伺っており、まちづくりも重要な要素の一つとして大きく作用するという認識である。

また、これまで関わった地域では「学校がなくなると文化そのものがなくなってしまうのではないか」という不安の声を伺った。私自身も、学校は地域の軸となる施設であると認識しているため、一定の規模は必要な前提だが、数だけで決めるものではないと考えている。

一方で、今後は自動運転などの新技術が普及することにより、新しい選択肢の可能性も出てくると考えている。技術の進展によって交通面の課題が解消され、結果として学校を維持できる可能性なども考えられる。中長期的な未来の動向も念頭に置きながらご検討いただきたい。

■次第6 協議

- （1）「鶴岡市の今後の学校の在り方についての計画(第三期計画)」の策定方法、策定フローについて
- （2）第三期計画における検討対象校基準について

（会長）本日ご意見をいただきたいポイントは、鶴岡らしい学校教育を実現するための学校の適正規模と、第三期計画の基準についてである。事務局からの報告やアドバイザーの講演を踏まえ、特に検討対象校基準や計画策定の進め方についてご意見・ご質問をいただきたい。

（委員C）検討対象の基準に該当する学校が小学校だけでなく4つの中学校も対象になっている点についてどういうことか。また、ただし書きで「中学校が閉校した場合、地域の要望があれば中学校グループ内に小学校を残す」とあるのは、例えば豊浦ブロックで中学校が閉校した際、豊浦小学校を残すことができるという意味か。

（教育施設在り方検討室長）小学校は6年生までで1学年1学級、中学校はクラス替えができる1学年2学級が必要であるため、両方とも「6学級未満」と設定している。ただし書きについては、おっしゃる通り、例えば豊浦中学校が閉校する場合に、地元のご要望があり地域で議論された上で、小学校を1校残すことも検討するという意味である。

（委員B）パブリックコメントのあり方について、スケジュールではパブリックコメントをしすぐに教育委員会の議決作成としているが、このような設定が教育委員会だけでなく市全体としても多いと感じていた。パブリックコメントの後に1ヶ月程度の猶予を設け、意見に対する回答や検討をしっかりと行ってから議決することが、投書していただいた方々に対する誠実な対応を示す上で必要ではないかというふうに考えている。そのため、パブリックコメントから教育委員会の議決作成まで1ヶ月程度猶予を空けたスケジュールを組んでいただけると大変ありがたい。

（教育施設在り方検討室長）ご提案として受け止めさせていただく。

(委員D) 17 ページの教職員の定数は学級数で決まるとの記載について、学級数が増えていくにつれて定数は具体的にどう決められるのか。また、第1期・第2期の時はパブコメ等をどのように進めていたのか。

(学校教育課長) 教職員定数の決まり方について、基本的に校長、教頭、養護教諭、事務の他に1学年1クラスであれば学級担任と教務主任等が配置となる。また、学級数が増えるにつれて人数も増えていくが、特に1学年で複数クラスがあるような学校の場合には、学級数に応じて担任を持たなくてもよい副担任等の先生が一定数配置される仕組みとなっている。

(教育施設在り方検討室長) 第1期・第2期の当時は、現在のようなパブリックコメントという制度自体がなく、実施していなかった。

(委員E) 要望になるが、資料13ページの複数の中学校に進学する小学校の状況のうち、京田小について、一中に40%、二中に60%という数字がある。京田小学校から一中に進学する平京田町内会は、宅地造成や賃貸住宅の増加で子育て世代が非常に多いことから、一中への進学割合に強く反映されていると感じる。また、同町内会の一部は六小と京田小を選択できる地域でもあるため、そうしたデータも踏まえて検討対象校の精査をもう一度していただきたい。

(教育施設在り方検討室長) 複数中学校に進学する小学校については、それぞれの学校で状況も異なることから、個別に学校毎に相談しながら進め、ご指摘を踏まえて今後協議させていただく。

(委員F) 複式学級になる場合の生徒の人数を確認したい。また、17 ページに中学校でも複式学級なしとある。中学校では複式学級というイメージはないが、中学校でも複式学級になる人数の基準があるのか。

(学校教育課長) 複式学級の基準について、小学校は1年生と2年生で合わせて8人以下で複式学級となり、2年生以上の場合はそれぞれ隣り合う2学年が合わせて16人以下で複式学級となる。中学校は2学年の合計が8人以下で複式学級となる。

(委員G) 3点ほど伺いたい。1点目は、この検討対象校の基準の中に時間距離の視点はなかったのかという点である。温海中学校ではすでにスクールバスで30分以上のところがあるはずであり、この案になれば1時間弱スクールバスに乗るということも想定される。そのため、生徒の体力面や精神面へのストレス、家庭学習への影響、また学校へ保護者が送迎しなければならない場合の負担が相当かかるのではないかと心配している。時間距離という視点を適正配置の考え方に盛り込んでいないのか伺いたい。

2点目は、フローの中に庁内の連絡調整会議があるが、この連絡調整会議でまちづくりや地域づくりも踏まえて今後の案にまとめる作業をするのか。

3点目はスケジュールについてである。地域の検討までに3回の在り方検討委員会が計画されているが、3回も会議をされれば地域で検討する前にほとんど決まったような形で進んでしまう

という懸念があるため、3回目の会議の前に各地域の検討委員会を開いて住民の意見を聞くべきではないかと思うがどうか。

（教育施設在り方検討室長）1点目の時間距離について、今回は学校での教育環境の視点から検討の対象となる学校の基準であることをご理解いただきたい。2点目の庁内連絡会議は、庁内のほとんどの部局から構成されており、まちづくりを担う建設部なども入って相談しながら進めている。3点目のスケジュールは、第2回目の協議状況を踏まえて開催時期等を検討する。

（教育長）私の方から補足する。委員のご発言のとおり、時間と距離は非常に大切な視点である。次回の第2回会議では地域の実情に応じた今後の適正配置や学校の在り方を検討していただく。教育委員会としても当然そこも考慮しながらご提案したいと考えているので第2回の会議での提案を踏まえて再度ご意見をいただきたい。

また、2回で全てを決めることは考えておらず、地域での検討が一番大切であるため、その前段階としてまず第1・2回で会議をし、それを基に地域で十分時間をかけて検討していただくという進め方を今回はとるのでご承知おきいただきたい。

（委員H）第2回の会議で検討対象校が通学する受け入れ校も決定されるのか。以前、大山小学校が加茂小学校と一緒にになった際、加茂地区の方々は学校がなくなるということで、反対され大変な話し合いになった。大山地区は受け入れる側であったが、受け入れる学校においても変化があり、校名や校章、校歌、体操着などが変わるといことも踏まえていただきたい。例えば大山に西郷や湯野浜が来た場合、大山ではまた校章が変わり、運動着も変わり、校歌も変わるというような変化があることから、受け入れる側の学校や地域の負担・心情についてももう少し汲み取って進めてほしい。

（教育施設在り方検討室長）次回ご提案するのは統合の組み合わせの案であり、この委員会です承されたら今後の統合が決まったということではなく、その案をもとに各地域でご検討いただくものである。受ける側の学校につきましても配慮して進めてまいりたい。

（教育長）第1期・第2期で14校が閉校統合した。私自身も田川小学校と長沼小学校の閉校に携わった。これまでの統合に際しては、校章・校歌・体操着等をどうしていくかについては、統合が決まってから、統合準備委員会を開催して話し合って決めてきた。それぞれの意見があることと思うが、統合が決まってから、そのことについて統合準備委員会で検討していくこととなる。

（委員I）学校の適正規模の考え方である17ページの「人間関係の固定化を防ぎ、社会性を育むクラス替えできる規模が必要」との記載について同感である。中学生は多感であり、たくさんのかを学ぶ時期でもある。その時期に多くの同年代の人たちと触れ合って人間としての幅を作ってほしいという願いがある。私自身、初任の際は十数人の小規模中学校にいたが、小規模校では中学校から高校に旅立つ際にハードルがあると考え。ともすれば、1クラスで9年間同じ人間関係の子たちがいきなり高校の大人数に行った時は、自分がやりたいことを自信を持

ってできるのかという不安がある。そのような面からも中学生は1学年2クラスは必要である
と考える。

また、学校行事についても同様であり、1学年1クラスの場合、運動会では1クラスを2つに
分けて競い合うような形で団結を図るというようなことをやっており、それがクラスとしての
本当のあり方かどうか疑問だという声が上がってきたこともある。そういった面からもやはり
人間関係の構築や学校行事、子どもたちが生き生きと生活していくためには1学年2学級以上
が必要と思うところが学校の現状である。

（委員J）今、皆様のお話を聞く中で、次代を担う子どもたちを育てていくという責務の重さ
と、地域にける方々の熱い思いを改めて感じたところである。地域コミュニティの核は小学
校であり、子どもたちの声が聞こえなくなると寂しいという声を聞いている。

私自身、統合した学校2校に勤務した経験があり、最初は羽黒小学校で羽黒二小と一小の統
合事務に携わり、そのあとは統合後の藤島小学校に勤務した。羽黒一小や長沼小の地域の方々
からは、子どもたちの声が聞かれなくなって非常に寂しいという声を聞く一方で、地域の方々
がいろんな工夫をして子どもたちに関わる行事等を作ってくださり頑張っている様子も見てき
たので、それだけではないのかなとも感じている。

そのうえで2点申し上げる。1点目は、人数だけが統合や存続の基準にならないというお話も
あったが、やはり人数は大切だと思っている。大規模校であればきめ細やかな指導のためにグ
ループを作ることができるが、少人数の学校で大規模校のような学習活動を経験することはま
ず難しい。今はICTを活用して進めることもできるが、やはり画面越しの関わりではなく、直
接関わっていくことの大切さを改めて感じている。多様性が言われる中、小学生のうちにいろ
んな子どもたちと触れ合うことは、子どもたちが成長し社会に出ていく上で非常に重要だと感
じている。

加えて2点目は、教職員配置についてである。適正な職員配置は学級数によって決まるた
め、人数が少なくなると、それを補うために山形県等でさまざまな加配措置をとっている。し
かし、それはあくまで加配措置であり、必ず配置されるとは限らない。そうなると、子ども
たちに関わる中で先生方の目はどうしても少なくなってしまう、どれだけのことができるのか教
員として非常に不安になる。やはりある程度の教職員の数は必要になってくると考えており、
今回提案されている学級数は、一定の基準として考えていくには適正だと思う。小学校も1学
年1学級では6年間クラス替えがないため、適正な学級数は複数学級編制ができる数が望まし
いと記憶しており、欲を言えば小学校も12学級くらいが良いのだろうとは思っている。ただ、
現状ではなかなか難しいため、まず複式にならない程度の学級数を維持することが、子ども
たちの経験を高め、深めていくためには必要だと考えている。

最後に、本校は1つの小学校から3つの中学校に分かれて進学するというイレギュラーな状
況にある。先ほど冒頭に教育長のお話もあったが、小中一貫教育を進めていく上で、そこがな
かなか難しいところであるのが正直なところである。1つの小学校から進む子どもたちは同じ中
学校に進めるようにしていただきたいし、そのことが今回話題になるということである。

（委員F）子どもたちの成長にとって適正なある程度の学級規模というのは、大事だと思
う。私もあさひ小学校で、朝日大泉小学校や大綱小学校を統合した立場だったことから非常

によく分かる。

23 ページのスケジュール表を見て、この地域検討委員会が1月から始まり12月までの1年間、つまり来年の12月には、地域としては何らかのここで結論を出すというイメージなのだろうか。そうとなると、朝日地区のことだけを考えても、小学校を統合したときの朝日の地域の人たちが、今中学校が統合対象になっているということをどの程度認識しているか。もしかしたら全く認識していないかもしれないところに、この降って湧いたように1月から1年間で結論を出す、ある程度の答えを出すということが、私は教育に関わる立場として非常に不安である。たぶん小学校を統合して1校になったときよりも、その地区から中学校がなくなるということの衝撃は大きなものだろうと思っている。

もうすでにこの会議が始まっているということは、この10月にも2月にも学校運営協議会があるわけだが、そこで話題にしているものか、1年間で劇的に進むことに対してショックが大きいのではないかと心配している。この1年間という期間について、長くなればいいというものではないかもしれないが心配である。

（教育施設在り方検討室長）このような基準や今後の子どもの数をお示したのはこの会議が初めてですので、まだ認識されていない方もたくさんいらっしゃると思う。そのため、今後地域に入っていくにあたっては、できるだけ丁寧な説明をして状況をご理解いただき、皆さんの意見を聞きながら進めていきたいと考えている。ご懸念の点については、まずはそのようなご心配があるということを踏まえ、しっかりとご説明させていただきたい。

（委員D）PTAの立場から申し上げる。児童数はミッションにも書かれているとおり、教育を適正な環境で行う上でとても大事な要素であると考えている。地域の特色ある教育を実践していく際、例えば伝統がある行事を継続していく上では、先生方は異動で変わっていく中で、そうした行事をしっかり支える保護者や地域の方々の存在が不可欠である。ある程度の人数がいないとそうした行事を持続していくことが難しくなるということも重要であり、そういった意味でも人数をしっかり確保することは、地域にとっても一人ひとりの子どもたちにいろんな機会を提供していく上で大切なことだと感じた。

もう一点、先ほどもあった中学校への進学ルートが複数ある件についてである。三小の場合は一中、二中、四中と分かれるわけだが、これは意見交換の中でも前向きな話として出ているものであり、全員の保護者の意見をすべて聞いているわけではないものの、やはりこうしていただけるとありがたいという声は聞いている。実際、私の場合も長男が四中に行くことになるが、進学割合が13%と少ないため、しっかりとその中で馴染んでいけるかという不安もあり、そうしたケアはいずれにしても非常に大事なことだと思っているので、こういったことも含めてしっかりと議論が進められていくことを期待している。

（会長）委員からの意見を聞いたうえで、最後にアドバイザーからコメントをいただきたい。

（アドバイザー）私自身、今日ご紹介した中では愛媛県今治市に関わり、学校配置の検討にも携わった。あわせて県立高校の存続・魅力化に向けた地域の活動にも関わり、一時期において毎週愛媛に通っていた経験がある。

今日もこの短時間でたくさんのご意見があったかと思うので、教育長からも話があったように、地域の皆さんのご意見をしっかりと丁寧に伺いながら前に進めることがすごく重要ではないかと感じている。特に鶴岡市は自治体として非常に面積が広く、中心部から、鼠ヶ関など新潟県の県境まであるので、ぜひ慎重な議論と積極的な議論によって、いろんな立場からのご意見を率直にぶつけていただきたいと思います。

（会長）本日はたくさんのご意見を皆様方から頂戴いたしましたと思います。皆様方から頂いたご意見をお伺いする限り、検討対象校の基準、そしてその後の計画策定の進め方についてある程度、事務局の原案通りでよいというふうに感じさせていただきましたが、そのような形でよろしいでしょうか。

（委員了承）

（会長）それではご了承いただいたということで、今後、事務局や皆様方と今日のご意見をより深く検討し、当委員会の意見としたい。

以上